

A Study on the Image of Five Space (front, back, center, edge, corner)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 啓史, 野沢, 久美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/406

空間イメージに関する研究

— 5つの空間領域(前、後ろ、真ん中、端っこ、隅っこ)からの考察 —

A Study on the Image of Five Space (front, back, center, edge, corner)

小西 啓史*
KONISHI, Hiroshi

野沢 久美子†
NOZAWA, Kumiko

要 約

われわれは、自分を取り巻いている空間をいくつかの領域に分けて認識している(今井, 1978; 小西・北岡・荒井・中屋, 2000など)。そして、それぞれの空間領域に対してはある一定のイメージを持っている。本研究では、われわれがこれら空間領域に対してどのようなイメージを持っているのかを明らかにすることを目的とする。

調査対象者は172名(男性33名、女性139名)であった。前報(小西・野沢, 2015)で確認された5つの領域(「前」「後ろ」「真ん中」「端っこ」「隅っこ」)を対象に、15個の形容詞対を用いて、これら領域に対してのイメージを聞いた。

形容詞対ごとの平均得点を分析した結果、「前」は活発で積極的なイメージが、「真ん中」は暖かくて陽気なイメージが、「端っこ」は静かで消極的なイメージが、「隅っこ」は狭くて不活発なイメージがあった。これらに対し「後ろ」は不活発で消極的なイメージはあったが、他の4領域に比べて明確なイメージはなかった。

次に、領域ごとと全データを使って因子分析を行った。その結果、5つの領域すべてにおいて3因子が抽出された。また、全データを使って分析した結果では2因子が抽出され、それぞれに「活動性・力量性因子」「評価性因子」と名付けた。この2因子をもとに領域ごとの平均得点を出したところ、「活動性・力量性因子」では領域間で大きな違いがあったが、「評価性因子」ではそれほど大きな違いは認められず、どの領域も比較的好ましいイメージでとらえられていた。

キーワード：空間領域、空間イメージ、空間表現語

* 人間科学研究所研究員／人間科学部人間科学科教授 † 武蔵野大学通信教育部非常勤講師

問 題

2014年5月26日～6月6日まで10回にわたり朝日新聞夕刊で「『端っこ』をたどって」という記事が連載された。ここでは、記者の通勤電車や会議での「端っこ志向」に始まり、話題は日本の端っこ与那国島や納沙布岬、世界の端っこクロアチア（ドブロプニク）やモルドバ（沿ドニエストル）にまで広がっている。

また、2015年1月19日には日経MJで「隅が好き」と題して、街の隅っこである袋小路探訪という街歩きが人気であることや、キャラクター「すみっこぐらし」が人気商品として売り上げを伸ばしていることなどが紹介され、商品トレンドとしての「隅っこ愛」が取り上げられている。どうやら「端っこ」や「隅っこ」は、われわれにとって魅力的で、なぜかひきつけられる空間のようである。

われわれは、自分を取り巻いている空間をいくつかの領域に分けて認識している（今井，1978；小西・北岡・荒井・中屋，2000など）。そして、それぞれの空間に対してはある一定のイメージを持っている。一般には、前や中央は比較的好ましい空間であり、端や隅はnegativeなイメージでとらえられることが多い。

しかし、公共空間における座席行動（例えば、電車の車両内やカフェにおける着席位置など）に関する研究では、端や隅を好む傾向があることがみとめられている（Sommer，1969；小西，1979など）。その理由として、身体の一部を壁などに近づけることによって生じる心理的安定感、壁を背にすることで空間全体が見やすくなるなどの防衛的優位性、また他者との接触を可能な限り避けるための方略などが、繰り返し述べられてきた（小西，2006）。これらの座席行動を見ると、端や隅が必ずしもnegativeで回避すべき空間ではなく、状況によっては積極的に志向されることを示している。

小西・野沢（2015）は、教室空間を対象に調査を行い、教室空間は「前（front）」「後ろ（back）」「真ん中（center）」「端っこ（edge）」「隅っこ（corner）」の5領域¹⁾に分けて認識されていることを明らかにした。さらに、これら5領域のもつイメージを調べたところ、好ましさにおいては「後ろ」が一番高く、「前」が一番低いことが明らかになった。また、因子分析の結果、「前」や「真ん中」は活動的で力強い空間であるが必ずしも好ましい空間とは認識されていないこと、「後ろ」「端っこ」「隅っこ」はあまり活動的な領域ではないが比較的好ましい領域として認識されていることが明らかになった。

しかし、小西・野沢の研究では教室空間を対象としたため、教室空間特有の傾向がみられた可能性がある。すなわち、教室においては一般に教壇に近い前方の席は好まれず、後ろや端の席が好まれる傾向がある（望月，1976；北川，2003；小西，1998など）。「前」よりも「後ろ」の方が好ましく評価されたのは、こうした教室内の空間領域に好みがあることを反映した結果であると推測された。

そこで、本研究ではこうした空間的状况要因を極力排除し、純粹に空間領域に対するイメージだけを抽出し、議論することを目的とする。

方 法

調査対象者

武蔵野大学人間科学部人間科学科の必修科目「心理学概論Ⅰ」（前半クラス、後半クラスの2クラス）を履修している学生が調査に協力した。前半クラスは79名（男子14名、女子65名）、後半クラスは93名（男性19名、女性74名）、合計172名であった。入門コースの学生であるため、大半は1年生（18, 19歳）である。上級生、留学生については回収後に分析対象から除いた。

手続き

授業時間を利用して質問紙に回答を求めた。5つの空間領域のイメージを15個の形容詞対を用いて5段階評価で聞いた。項目は、井上・小林（1985）からSD法において使用頻度の高いものおよび空間イメージに関するものを選んで用いた。これは前報告（小西・野沢, 2015）においても使用されたものである。

結 果 と 考 察

有効データは、前半クラス78名（男性14名、女性64名）、後半クラス87名（男性19名、女性68名）、合計165名（男性33名、女性132名）であった。以下、このデータを用いて分析した。

1. 評価項目（形容詞対）ごとの空間イメージ

Tab.1に、評価項目ごとに5領域の平均値を示した。一元配置の分散分析を行ったところ、全ての項目において領域間に有意差が認められた。同時にTukeyのHSD法による多重比較も行った。以下、評価項目ごとに分析結果を示す。

（1）やわらかいーかたい

5領域間で有意差が認められた（ $F(4,820)=29.02, p<.001$ ）。多重比較を行った結果、「前-後ろ」、「前-真ん中」、「後ろ-真ん中」、「後ろ-端っこ」、「後ろ-隅っこ」、「真ん中-端っこ」、「真ん中-隅っこ」の間に1%水準で有意差がみとめられた。すなわち、「真ん中」、次いで「後ろ」にやわらかいというイメージがあり、「前」、「端っこ」、「隅っこ」はかたいイメージがあった。

（2）活発なー不活発な

5領域間で有意差が認められた（ $F(4,820)=151.19, p<.001$ ）。多重比較を行った結果、「後ろ-端っこ」を除くすべての組み合わせに1%水準で有意差が認められた。すなわち、「前」、次いで「真ん中」に活発なイメージがあり、「後ろ」、「端っこ」、「隅っこ」は不活発なイメージがあった。特に、「前」は活発なイメージが、「隅っこ」は不活発なイメージが強かった。

Table 1 評価項目（形容詞対）ごとの領域別平均得点

() は標準偏差

	1. やわらかい —かたい	2. 活発な —不活発な	3. 気持ちの良い —気持ちの悪い	4. 暖かい —冷たい	5. 広い —狭い	6. 良い —悪い	7. 積極的な —消極的な	8. うるさい —静かな
前	2.57 (1.08)	4.23 (0.89)	3.35 (0.98)	3.35 (0.96)	3.35 (1.23)	3.53 (1.02)	4.37 (0.87)	3.07 (1.24)
後ろ	3.02 (1.17)	2.43 (1.24)	3.12 (0.99)	2.66 (1.03)	3.23 (1.26)	3.01 (1.13)	2.09 (1.01)	3.01 (1.31)
真ん中	3.43 (0.95)	3.44 (0.85)	3.20 (0.93)	3.56 (0.89)	2.86 (1.15)	3.38 (0.92)	3.35 (0.79)	3.30 (0.91)
端っこ	2.41 (1.14)	2.22 (1.12)	3.20 (1.06)	2.34 (1.02)	2.31 (1.34)	3.26 (1.17)	2.12 (0.90)	2.02 (0.98)
隅っこ	2.32 (1.17)	1.82 (0.94)	2.98 (1.07)	2.21 (0.98)	1.87 (1.13)	2.90 (1.11)	1.97 (0.97)	1.80 (0.95)

	9. 陽気な —陰気な	10. 強い —弱い	11. 鋭い —鈍い	12. 好きな —嫌いな	13. 動的な —静的な	14. 明るい —暗い	15. 派手な —地味な
前	3.52 (1.07)	3.60 (1.02)	3.45 (0.97)	3.16 (0.99)	3.65 (1.22)	3.71 (1.13)	3.49 (1.12)
後ろ	2.91 (1.16)	2.92 (1.13)	2.73 (1.02)	3.19 (1.09)	2.83 (1.22)	2.88 (1.17)	2.86 (1.16)
真ん中	3.51 (0.83)	3.16 (0.73)	2.97 (0.72)	3.42 (0.91)	3.33 (0.89)	3.59 (0.86)	3.38 (0.76)
端っこ	2.37 (1.04)	2.37 (0.95)	2.93 (1.08)	3.34 (1.13)	2.04 (0.98)	2.32 (1.07)	2.15 (0.98)
隅っこ	2.02 (1.02)	2.15 (0.94)	2.73 (1.10)	3.11 (1.13)	1.90 (0.96)	1.91 (0.90)	1.91 (0.91)

(3) 気持ちの良い—気持ちの悪い

5領域間で有意差が認められた ($F(4,820)=3.03, p<.05$)。多重比較を行った結果、「前—隅っこ」のみ1%水準で有意差が認められた。すなわち、「前」は気持ちの良いイメージ、「隅っこ」は気持ちの悪いイメージがあったが、いずれの領域においても大きな差はなかった。

(4) 暖かい—冷たい

5領域間で有意差が認められた ($F(4,820)=75.60, p<.001$)。多重比較を行った結果、「端っこ—隅っこ」を除くすべての組み合わせに1%水準で有意差が認められた（「後ろ—端っこ」のみ5%水準で有意差）。すなわち、「前」と「真ん中」は暖かいイメージが、「後ろ」、「端っこ」、「隅っこ」は冷たいイメージがあった。特に、「真ん中」は暖かいイメージが強かった。

(5) 広い—狭い

5領域間で有意差が認められた ($F(4,820)=42.47, p<.001$)。多重比較を行った結果、「前—後ろ」、「後ろ—真ん中」を除くすべての組み合わせにおいて1%水準で有意差が認められた。すなわち、「前」、「後ろ」、「真ん中」、「端っこ」、「隅っこ」の順で狭いイメージがもたれていた。特に、「前」は広いイメージが、「隅っこ」は狭いイメージが強かった。

(6) 良い－悪い

5領域間で有意差が認められた ($F(4,820)=29.74, p<.001$)。多重比較を行った結果、「前－真ん中」、「後ろ－隅っこ」を除くすべての組み合わせにおいて1%水準で有意差が認められた（「後ろ－真ん中」は5%水準）。すなわち、「前」と「真ん中」は良いイメージが、「隅っこ」には悪いイメージがあったが、全体的にはいずれの領域においても大きな差はなかった。

(7) 積極的な－消極的な

5領域間で有意差が認められた ($F(4,820)=215.71, p<.001$)。多重比較を行った結果、「後ろ－端っこ」、「後ろ－隅っこ」、「端っこ－隅っこ」を除くすべての組み合わせにおいて1%水準で有意差が認められた。すなわち、「前」と「真ん中」は積極的なイメージが、「後ろ」、「端っこ」、「隅っこ」は消極的なイメージがあった。特に、「前」は積極的なイメージが、「後ろ」、「端っこ」、「隅っこ」は消極的なイメージが強かった。

(8) うるさい－静かな

5領域間で有意差が認められた ($F(4,820)=63.92, p<.001$)。多重比較を行った結果、「前－端っこ」、「前－隅っこ」、「後ろ－端っこ」、「後ろ－隅っこ」、「真ん中－端っこ」、「真ん中－隅っこ」において1%水準で有意差が認められた。一方、「前－後ろ」、「前－真ん中」、「後ろ－真ん中」、「端っこ－隅っこ」では有意差は認められなかった。すなわち、「真ん中」はうるさいイメージが、「端っこ」、「隅っこ」は静かなイメージがあった。

(9) 陽気な－陰気な

5領域間で有意差が認められた ($F(4,820)=71.05, p<.001$)。多重比較を行った結果、「前－真ん中」を除くすべてにおいて1%水準で有意差が認められた（「端っこ－隅っこ」のみ5%水準）。すなわち、「前」と「真ん中」は陽気なイメージが、「端っこ」、「隅っこ」は陰気なイメージがあった。特に「隅っこ」は陰気なイメージが強かった。

(10) 強い－弱い

5領域間で有意差が認められた ($F(4,820)=59.81, p<.001$)。多重比較を行った結果、「後ろ－真ん中」、「端っこ－隅っこ」を除くすべてにおいて1%水準で有意差が認められた。すなわち、「前」、「真ん中」は強いイメージが、「端っこ」、「隅っこ」は弱いイメージがあった。特に「前」は強いイメージが強かった。

(11) 鋭い－鈍い

5領域間で有意差が認められた ($F(4,820)=14.65, p<.001$)。多重比較を行った結果、「前－後ろ」、「前－真ん中」、「前－端っこ」、「前－隅っこ」において1%水準で有意差が認められ、それ以外では有意差が認められなかった。すなわち、特に「前」は鋭いイメージがあったが、それ以外では明確な違いは見られなかった。

(12) 好きな－嫌いな

5領域間で有意差が認められた ($F(4,820)=2.86, p<.05$)。多重比較を行った結果、「真ん中－隅っこ」においてのみ5%水準で有意差が認められたが、それ以外では有意差が認められなかった。すなわち、空間の好みにおいては「真ん中」が他に比べてやや好ましいイメージがあるものの、どの領域もほとんど差がなかった。総じて、どの領域も好ましいイメージがあった。

(13) 動的な－静的な

5領域間で有意差が認められた ($F(4,820)=85.84, p<.001$)。多重比較を行った結果、「前－真ん中」、「端っこ－隅っこ」を除き、すべての項目において1%水準で有意差が認められた。すなわち、「前」と「真ん中」は動的なイメージが、それ以外は静的なイメージがあった。特に、「前」は動的なイメージが、「端っこ」や「隅っこ」は静的なイメージが強かった。

(14) 明るい－暗い

5領域間で有意差が認められた ($F(4,820) = 93.62, p<.001$)。多重比較を行った結果、「前－真ん中」を除き、すべてにおいて1%水準で有意差が認められた。すなわち、「前と真ん中」は明るいイメージが、「端っこ」や「隅っこ」は暗いイメージがあった。特に、「前」は明るいイメージが、「隅っこ」は暗いイメージがあった。

(15) 派手な－地味な

5領域間で有意差が認められた ($F(4,820)=83.61, p<.001$)。多重比較を行った結果、「前－真ん中」、「端っこ－隅っこ」を除くすべてにおいて1%水準で有意差が認められた。すなわち、「前」と「真ん中」は派手なイメージがあるが、「端っこ」と「隅っこ」は地味な

Table 2 領域のイメージ (Table1 のまとめ)

評価項目	前	後ろ	真ん中	端っこ	隅っこ
1 やわらかい－かたい	かたい		やわらかい	かたい	かたい
2 活発な－不活発な	活発な○	不活発な	活発な	不活発な	不活発な○
3 気持ちの良い－悪い	気持ちの良い				
4 暖かい－冷たい	暖かい	冷たい	暖かい	冷たい	冷たい
5 広い－狭い	広い			狭い	狭い○
6 良い－悪い	良い		良い		
7 積極的な－消極的な	積極的な○	消極的な	積極的な	消極的な	消極的な○
8 うるさい－静かな			うるさい	静かな	静かな○
9 陽気な－陰気な	陽気な		陽気な	陰気な	陰気な
10 強い－弱い	強い			弱い	弱い
11 鋭い－鈍い	鋭い				
12 好きな－嫌いな			好きな	好きな	
13 動的な－静的な	動的な		動的な	静的な	静的な○
14 明るい－暗い	明るい		明るい	暗い	暗い○
15 派手な－地味な	派手な		派手な	地味な	地味な○

*平均値が3.3以上、2.7以下の項目を記入。そのうち4.0以上、2.0以下には○をつけた。

イメージがあった。特に、「隅っこ」は地味なイメージが強かった。

以上の結果を整理したのが Tab.2 である。これを見ると「前」「真ん中」「端っこ」「隅っこ」の 4 領域はある程度固定的なイメージがあるが、「後ろ」のイメージは必ずしも固定的なものではないことがわかる。

また、全体的にみると、「端っこ」や「隅っこ」は negative なイメージがあるようであるが、好ましさ（好きな－嫌いな、気持ちの良い－気持ちの悪いなど）では 5 領域間には大きな差がない。このことから「端っこ」や「隅っこ」も必ずしも否定的な空間ではないことが明らかである。

2. 因子分析によって抽出された因子と空間イメージ

5 つの領域個々への回答データと全データをまとめたもの、都合 6 つの因子分析（主因子法、Varimax 回転）を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から、5 つの領域においては 3 因子解を、全データをまとめた分析においては 2 因子解を採用した。

次に、6 つの因子分析の結果すべてにおいて因子負荷量が低かった「11. 鋭い－鈍い」(0.35 未満)を除いて 14 項目を使って 2 回目の因子分析（主因子法、Varimax 回転）を行った。その結果、5 領域すべてにおいては 3 因子が、全データをまとめた分析では 2 因子が抽出された (Tab.3-1～6)²⁾。

以下、全データをまとめて因子分析を行った結果 (Tab.3-6) をもとに考察する。抽出された 2 つの因子に対し、“活動性・力量性因子” “評価性因子” と名付けた。小西・野沢の研究では評価性因子に分類された「1. やわらかい－かたい」、「広い－狭い」が、本研究では活動性・力量性因子に移ったが、いずれも因子負荷量は低く、また評価性因子での値とほとんど差がなかった。このことから、空間イメージ評価は“活動性・力量性因子” “評価性因子” の 2 因子でとらえることが妥当であると考えられる。内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、“活動性・力量性因子” で $\alpha = .920$ 、“評価性因子” で $\alpha = .797$ と十分な値が得られた。

全データをまとめて行った因子分析によって得られた 2 因子の得点の平均値と標準偏差を領域別で示したのが Tab.4 である。平均値を出すにあたっては、因子負荷量の低かった「1. やわらかい－かたい」(0.35 未満)を除き、一元配置の分散分析と Tukey の HSD 法による多重比較を行った。以下、因子ごとに分析結果を示す。

“活動性・力量性因子” において領域間に有意差が認められた ($F(4,8245)=746.83$, $p<0.001$)。多重比較の結果は、すべての領域間の組み合わせにおいて有意差 (1%水準) が認められた。“評価性因子” においても領域間に有意差が認められた ($F(4,2470)=10.27$, $p<0.001$)。多重比較の結果は、「前－後ろ」、「前－隅っこ」、「後ろ－真ん中」、「真ん中－隅っこ」、「端っこ－隅っこ」において 1%水準で有意差が認められた。

これらの結果から、「前」や「真ん中」は活動的で力強いイメージがあるが、「後ろ」、「端っこ」、「隅っこ」は活動的なイメージがないこと、特に「隅っこ」は不活発なイメージがあることが明らかになった。また、「前」や「真ん中」は好ましいイメージがあり、「前」と比べると「隅っこ」はあまり好まれていないことが明らかになった。しかし、好ましさについては領域間にそれほど大きな差はなかった。

Table 3-1 領域のイメージ【前】

	I	II	III	共通性
15 派手な-地味な	.717	.224	.292	.649
9 陽気な-陰気な	.675	.271	.157	.554
14 明るい-暗い	.653	.437	.158	.642
13 動的な-静的な	.645	.051	.110	.431
8 うるさい-静かな	.614	.159	.344	.520
10 強い-弱い	.533	.279	-.176	.392
2 活発な-不活発な	.506	.173	.010	.286
5 広い-狭い	.371	.350	.216	.306
7 積極的な-消極的な	.331	.018	-.183	.143
6 良い-悪い	.224	.884	-.000	.831
12 好きな-嫌いな	.097	.721	.121	.544
3 気持ちの良い-気持ちの悪い	.186	.516	.250	.363
4 暖かい-冷たい	.334	.483	.341	.461
1 やわらかい-かたい	.053	.248	.761	.644
固有値	3.183	2.434	1.148	
寄与率 (%)	22.74	17.39	8.20	
累積寄与率 (%)	22.74	40.13	48.34	

Table 3-2 領域のイメージ【後ろ】

	I	II	III	共通性
13 動的な-静的な	.747	.101	.314	.667
8 うるさい-静かな	.746	.099	.242	.625
14 明るい-暗い	.719	.384	.225	.715
9 陽気な-陰気な	.709	.362	.144	.654
15 派手な-地味な	.705	.251	.203	.715
10 強い-弱い	.614	.172	.097	.416
6 良い-悪い	.124	.820	.026	.689
3 気持ちの良い-気持ちの悪い	.127	.735	.043	.558
4 暖かい-冷たい	.209	.661	.290	.565
12 好きな-嫌いな	.132	.626	.106	.420
5 広い-狭い	.263	.350	.158	.254
1 やわらかい-かたい	.194	.399	.018	.197
2 活発な-不活発な	.335	.123	.845	.842
7 積極的な-消極的な	.198	.107	.489	.290
固有値	3.358	2.778	1.355	
寄与率 (%)	23.98	19.84	9.68	
累積寄与率 (%)	23.98	43.83	53.51	

Table 3-3 領域のイメージ【真ん中】

	I	II	III	共通性
13 動的な-静的な	.764	-.059	.061	.590
15 派手な-地味な	.721	.030	.126	.536
7 積極的な-消極的な	.649	.135	-.123	.454
10 強い-弱い	.626	.151	-.066	.419
9 陽気な-陰気な	.598	.203	.214	.444
8 うるさい-静かな	.587	-.294	.239	.488
2 活発な-不活発な	.518	.115	.257	.348
14 明るい-暗い	.501	.191	.423	.467
6 良い-悪い	.072	.817	.321	.776
3 気持ちの良い-気持ちの悪い	.131	.713	.129	.542
12 好きな-嫌いな	.065	.608	.096	.383
5 広い-狭い	.020	.398	.062	.163
1 やわらかい-かたい	-.035	.242	.559	.372
4 暖かい-冷たい	.345	.274	.498	.443
固有値	3.284	2.059	1.081	
寄与率 (%)	23.46	14.71	7.72	
累積寄与率 (%)	23.46	38.17	45.89	

Table 3-4 領域のイメージ【端っこ】

	I	II	III	共通性
13 動的な-静的な	.771	.319	-.015	.696
8 うるさい-静かな	.761	.338	-.075	.699
15 派手な-地味な	.628	.423	.157	.597
10 強い-弱い	.605	.109	.308	.473
7 積極的な-消極的な	.525	.296	.094	.372
4 暖かい-冷たい	.331	.237	.319	.267
14 明るい-暗い	.323	.742	.246	.716
2 活発な-不活発な	.298	.683	.127	.572
9 陽気な-陰気な	.292	.641	.096	.505
5 広い-狭い	.188	.582	.241	.432
1 やわらかい-かたい	.173	.515	.019	.296
6 良い-悪い	.071	.272	.846	.794
12 好きな-嫌いな	-.082	.211	.797	.657
3 気持ちの良い-気持ちの悪い	.252	-.055	.776	.668
固有値	2.738	2.703	2.330	
寄与率 (%)	19.56	19.30	16.66	
累積寄与率 (%)	19.56	38.86	55.52	

Table 3-5 領域のイメージ【隅っこ】

	I	II	III	共通性
8 うるさい-静かな	.747	.273	.023	.633
13 動的な-静的な	.742	.280	.012	.628
7 積極的な-消極的な	.693	.318	.187	.617
15 派手な-地味な	.641	.331	.208	.564
10 強い-弱い	.565	.158	.168	.372
2 活発な-不活発な	.454	.688	.094	.688
5 広い-狭い	.207	.635	.055	.449
9 陽気な-陰気な	.292	.594	.142	.458
14 明るい-暗い	.356	.551	.249	.492
1 やわらかい-かたい	.132	.396	.261	.242
12 好きな-嫌いな	.016	.104	.836	.710
6 良い-悪い	.021	.351	.813	.784
3 気持ちの良い-気持ちの悪い	.274	.014	.553	.382
4 暖かい-冷たい	.429	.239	.432	.428
固有値	3.056	2.269	2.122	
寄与率 (%)	21.83	16.21	15.15	
累積寄与率 (%)	21.83	38.03	53.19	

Table 3-6 領域のイメージ【全体】

	I	II	共通性
13 動的な-静的な	.834	.041	.656
15 派手な-地味な	.818	.196	.669
14 明るい-暗い	.779	.335	.696
8 うるさい-静かな	.774	.040	.585
2 活発な-不活発な	.749	.177	.626
9 陽気な-陰気な	.742	.258	.599
7 積極的な-消極的な	.665	.123	.527
10 強い-弱い	.663	.183	.466
4 暖かい-冷たい	.567	.404	.514
5 広い-狭い	.475	.321	.351
1 やわらかい-かたい	.323	.268	.268
6 良い-悪い	.192	.867	.595
12 好きな-嫌いな	.045	.746	.473
3 気持ちの良い-気持ちの悪い	.164	.612	.382
固有値	5.280	2.321	
寄与率 (%)	37.72	16.58	
累積寄与率 (%)	37.72	54.29	

Table 4 領域ごとの「活動性・力量性」「評価性」因子の平均得点

() は標準偏差

因子名	前	後ろ	真ん中	端っこ	隅っこ
活動性・力量性	3.63 (1.14)	2.71 (1.20)	3.37 (0.90)	2.23 (1.05)	1.96 (0.98)
評価性	3.34 (1.01)	3.11 (1.07)	3.33 (0.93)	3.27 (1.12)	2.99 (1.10)

前報では、評価性因子の得点は「後ろ」「端っこ」「隅っこ」の方が高く、「前」「真ん中」は得点が低かったが、これは先に考察したように教室空間を対象にしたためであると考えられる。今回の研究では、これとは逆に「前」「真ん中」の評価性因子の得点が高く、「隅っこ」の得点は低かった。活動性・力量性因子については前回も今回も同一の結果、すなわち「前」や「真ん中」は活発で力強いイメージがあり、「後ろ」や「端っこ」「隅っこ」は静かで消極的なイメージがあった。

以上の結果から、空間のイメージは基本的には「活動性・力量性因子」、すなわち活動的か力強いかによって作られるものであると考えられる。一方「評価性因子」、すなわち好ましきについてのイメージは一定ではなく、個人特性や状況によって変化することが推測される。個人の好みやそのときの状況によっては、「端っこ」や「隅っこ」が好ましく思われることもある。本論文の最初にあげた「端っこ志向」や「隅っこ愛」も個人特性や社会的状況によるものであると考えることができるだろう。

注

- 1) デジタル大辞泉 (2014) によれば、空間表現語の意味は以下のようなものである。
「前」: 普通の状態で顔または視線の向いている方向。連続するものの初めの部分。
「後ろ」: 人や物の正面とは反対の側。順序の後の方。
「真ん中」: 距離・場所・順序などで、ちょうど中央にあたる場所。
「端っこ (端)」: 中央や中心からいちばん離れた部分。ある場所や空間内の周辺に近い部分。
「隅っこ (隅)」: 囲まれた区域のかど。中央でない所。端の方や奥の方。また、目立たない所。
- 2) 主因子法、Promax 回転を用いた場合も同様の結果が得られた。

引用文献

- 朝日新聞 (2014) 端っこをたどって 2014年5月26日～6月6日夕刊
デジタル大辞泉 (2014) 小学館
今井四朗 (1978) 指示代名詞の指示機能について 北海道大学文学部人文科学論集, 15, 1-16.
井上正明・小林利宣 (1985) 日本における SD 法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究, 33, 253-260.
北川歳昭 (2003) 教室空間における着席位置の意味 風間書房
小西啓史 (1979) 人間の空間行動に関する研究 (1) 一車両内におけるプライベートシー保持について— 日本応用心理学会第46回大会発表論文集, 24.
小西啓史 (1998) 教室内の着席行動—小学生たちの座席指向性について— 武蔵野女子大学紀要, 33, 205-212.
小西啓史・北岡和彦・荒井理帆・中屋淑 (2000) 指示代名詞法を用いた個人空間の研究, 人間研究, 5, 1-12.
小西啓史 (2006) 喫茶店やレストランで壁際の席からうまっていくのはなぜ? (心理学 Q & A), 心理学ワールド, 34.

- 小西啓史・野沢久美子（2015）行動空間における領域感とその評価 —空間表現語（前、後ろ、真ん中、端っこ、隅っこ）からの一考察— 武蔵野大学人間科学研究所年報, 4, 81-93.
- 望月衛（1976）個人空間の中で—飲食住の心理— ブレーン出版
- 日経 MJ（2015）隅が好き 2015年1月19日（月曜日）
- Sommer,R.（1969）Personal Space: The behavioral basis of design. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.（穂山貞登（訳）1972 人間の空間—デザインの行動的研究— 鹿島出版会）